開会の挨拶

西　村　周　三（京都大学理事／教育・学生・国際（教育）担当）

（西村）15 回の大学教育研究フォーラムの開催に当たり、京都大学を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。

と言いながら、実は私はそちらで挨拶すると思っていたら、こんな晴れがましい席で、大変恐縮です。このフォーラムは、既に今年で 15 回目になります。この集会は、意図が大学をフィールドとする実践研究の交流の場という形で、すっかり定着してまいりました。今回も北は北海道から南は沖縄まで、全国からおよそ 550 人の方にご参加いただくことができました。既にご承知と思いますが、大学コンソーシアム京都で第 14 回の FD フォーラムが先日、2 月 28 日から 3 月 1 日にかけて、京都の龍谷大学で全国から 1200 人以上の関係者を集めて開催されたばかりです。今回もかなり大規模な FD フォーラムということで、京都盆地という狭いところで、短い間に連続して 2 回も開催されることになります。両方にご参加いただいている先生方も多いかと存じます。

こういう意味で、今皆さんもご承知かと思いますが、この FD に関しては西高東低という評判が現在立っておりますが、そういう意味で、この評判もなるほどと思う次第です。もちろん、大学コンソーシアム京都と京都大学とは、うまくすみわけをしていると、私どもは考えております。

今回のフォーラムでは、私がご挨拶させていただいた直後に、特別講演、シンポジウム、そして八つの小講演、八つのラウンドテーブル企画、38 の個人研究発表が準備されております。実に多彩なプログラムであろうかと思います。

特別講演では、マサチューセッツ工科大学の飯吉先生が、カーネギー教育財団の SOTL という理念に支えられた先生ご自身のこれまでの研究と実践の成果をまとめられ、FD の在り方についてお話されることになっております。

また、これを受けてシンポジウムでは、FD の組織化について、文部科学省の今泉さんに行政側の期待を述べていただき、続いて FD の学内連携、地域連携に尽力しておられます山形大学の小田先生、島根大学の山田先生、そして本学の松下さんにお話しいただき、会場の参加者の皆様と共に議論を深めたいと考えております。

小講演では、大学評価・学位授与機構の川口先生、愛媛大学の佐藤先生など、大学教育に関する卓越した専門家の方々をお招きして、お話を聞くことができます。

さらにラウンドテーブル企画では、ICT を活用した FD、批判的思考、大学における学習空間、ティーチング・ポートフォリオ、PBL 教育、FD の担い手としての若手教員、学生と FD、大学授業における学習など、最先端の話題も最もふさわしい方々からお聞きできるように配慮しました。

最後に、38 件に及ぶ個人研究の発表の一部についても、皆様におつきあいいただくことができましたら大変素晴らしいと考えております。

さて、私は教育担当の理事です。国立大学は今、どこでも第 2 期中期計画の策定に精を出しているところです。この策定に当たりましては、FD の法制的義務化、また学士課程教育に焦点を当てた中教審答申等々、考えるべきテーマがたくさんあります。大学教育改革を進めるための外部環境は、次第に整ってきたという印象を持っています。しかし、実際には、大学の個々の教育の在り方を改善するためには、決して法の整備だけで十分ではないことは明らかです。例えば私どもの大学教育が現在直面している課題として、グローバル化、ユニバーサル化などがあります。それぞれユニバーサル化とグローバル化のどちらをどのように重視しという問題に関しては、個々の大学に関して千差万別であろうと思います。個々の大学は、こういった課題を解決するために、それぞれのローカリティに則した最適解を求める必要があります。

私ども京都大学も、私どもの大学の個性に応じた最適解を求めて、今、様々な場所で議論しながら苦闘しているというのが正直なところです。しかも、大学を抱える経営状況に関しては、今は大変厳しいですし、ここ数年さらに厳しくなる可能性もあります。

そういう観点から、京都大学では早くから、FD に関して地域連携が大切であることを考えまして、関西地区 FD 連絡協議会の組織化に尽力をしてまいりました。これに関しては、幸い文部科学省からの積極的なご支援があります。

この協議会は、地域の高等教育機関の過半の参画を得て、この1年間、積極的な活動をしてまいりました。昨日、ちょうどこのフォーラムと重ねるように、第2回の関西地区FD連絡協議会公開研究会を開催し、盛会のうちに終わったところです。私どもの京都大学のFD、さらに教育改善については、実は私がいろいろな場で率直な話を申し上げて、外から見るほど決してうまくはいっていないという話をしてまいりました。

そうしたら、皆様から、京都大学はとても素晴らしいように見えるのに、本当にそうなのかというご質問をいただいたりして、学内で、本当は学外に向けていい格好を見せるか、それとも実情をさらけ出すかという議論も含めて、今進めているところです。内実の話、そして対外的に宣伝をする話の二つの組み合わせも、大変難しい課題かと思っておりますが、こういうフォーラムを通じて、各大学が今申した課題も含めて協働することができると大変ありがたいと思っております。

この学年末、大変忙しい時期に、遠くからわざわざご参加いただいた先生方に深く感謝の意を表したいと思います。このフォーラムで、明日まで有意義な議論が展開されますことを期待しまして、京都大学総長の代理として、私が開会の言葉を述べさせていただきました。どうかよろしくお願いします。

（大塚）　西村先生、どうもありがとうございました。西村理事は知る人ぞ知る、京都大学のオーケストラ部の顧問でもあります。私も何度か聴きに行っていますが、京都大学のオーケストラというのは、なかなかのものなのです。そういう意味でハーモニーを追求することが、今日の西村理事のお話しのモチーフになっているのではなどと感じながら伺っていました。どうもありがとうございました。

それでは、早速プログラムを進めてまいりたいと思います。まず、西村理事からもご紹介がありましたが、「21世紀のFDモデルの構築に向けて」と題して飯吉透先生に特別講演をお願いいたします。副題にあります“Scholarship of Teaching and Learning”は、SOTLと略され、「ソートル」と呼んだりしていますが、日本語に訳すと「教授・学習の学識」ということになるでしょうか。まさにこのフォーラムは、SOTLの理念にぴったりする場であると我々は思っているわけですが、そのコンセプトを実際にアメリカで推進してきているカーネギー教育振興財団の先生方をこの1月にお呼びして国際シンポジウムを行ったところでもあります。

その際にもご登壇いただきましたが、そういったSOTLの概念や、テクノロジーを生かしたアメリカのFDの状況、今後のFDの在り方につきまして、改めて飯吉先生にご講演をいただこうと思います。パワーポイントにありますように、現在はMITの教育イノベーション・テクノロジー局の上級ストラテジストとなられております。昨年秋まではサンフランシスコ郊外のスタンフォードにありますカーネギー財団の上級研究員・知識メディア研究所所長として、FDに関するツールを開発されてきてもおられますので、我々もそういうノウハウを日本でも活用していこうと思っているところです。

それでは飯吉先生、よろしくお願いいたします。